

一、依前韻奉謝白石賜和 <small>鳩巢</small>	四二五
一、甲午上元。陪天爵堂宴。奉和鳩巢先生高韻。 三首 <small>田代</small>	四二五
一、依前韻謝鶴樓 <small>鳩巢</small>	四二五
一、早春陪筑州源公宴 <small>南景春</small>	四二五
一、甲午元日。作二首呈滄浪先生梧右。伏乞郵政試 毫 <small>田代</small>	四二六
一、雨後與諸君共賞堂前紅梅 <small>白石</small>	四二六
一、再用紅梅韻重求諸君賜和 <small>白石</small>	四二六
一、和白翁紅梅之韻 <small>鳩巢</small>	四二六
一、白石先生用和故事即席賦成	四二七
一、藤相公詩白石次韻	四二七
一、天爵堂小集賦紅梅	四二八
一、壯士不病瘡	四二八
一、井上通女の詩歌	四二八
一、葛卷昌興舊宅に題する詩	四二八
一、願命その他の出典	四二八
一、葛卷昌興の歌	四二九
一、紫野芳春夫人御自書達磨之御贊	四二九
一、鶴	四二九

一、朱子調息箴	四二九
一、水戸光圀返禮の和歌	四三〇
一、太神宮懷古 <small>山崎嘉</small>	四三〇
一、豐社懷古 <small>被道</small>	四三〇
一、水戸光圀致仕歸東の詩	四三〇

### 可觀小説卷一

一、内藤三左衛門の無我と本多平八郎の武功  
味方原合戦の前に、見付にて、濱松の人数を數十騎物見に御出し候處、武田方よりあの物見の人数をくひとめ候様にと信玄被申付、大勢付き申候。近道有之候て、甲州の人数存知申間敷と、其道を引候處、成程よく案内存候て、其近道の方へひと付き申候。然處に内藤三左衛門大坂御城番内藤式部先祖之由無我の事感入たる儀と存候。右之様子被見候て、最早何共人数引上候事成申間敷候。此上はあのさいかち原の前にて敵をさへ候て、引上げ候はど何とぞ成可申候。乍然我等は成不申候。御自分より外は無之と本多平八に被申候。其時平八心得候由にて只一騎、敵と味方の間を横にのりわり、敵の方へ馬を引むけ候て鎧をたて敵をにらみ被申候へば、甲州勢其勢に辟易してすゝみ不申候。其内味方無難引上げ申候。一人當千とは平八杯の事と存候。されども平八の勇力はいまだ類も可有之候。三左衛門我等は不成と申候事、有様成事に候。武邊の事には我入りきみ有之候て、ならぬ

と申候て人にさせ申事は不仕ものに候。此三左衛門も數度覺の人にて、臆したる人にては無之候。常に一分の武道を功にせずして、國の御爲を被存候て、平八にゆづり被申候。殊勝成事に候。平八は大力量人にて候。かやうの所にて敵を退け候力量無之候ては仕得不申候故、平八を見立被申候。

一、台徳公關原御遲參の事  
關原の時慶長五年九月初日、權現様江戸御發駕被成候。其時分台徳院様には、信州上田に御座候て眞田と對陣被成候處、濃州の敵城落申儀御聞被成、急に木曾路を御上り被成候。其内に關原落居いたし、權現様には草津に御在陣被成候所へ、台徳院様御着被成候。其時台徳院様には、本多佐渡守・榊原式部大輔など御供にて候。權現様の御人数は井伊・本多はじめ關原にて手に逢候故、甲冑・指物など散々に損じ候處へ、台徳院様御人数見事成軍裝にて、殊の外目に立候て見ぐるしく候由。左様に可有之候。權現様以外の外御機嫌惡敷候て、台徳院様へ御對顔不被成候。其時榊原、御前へ罷出候て直に申上候は、此度中納言様おそく御追付被成、手に御逢不被成候とて御對顔不被成事、御情なき儀に